

◆ 目黒都税事務所長賞 ◆

「「当たり前」をつくる税」

東京都立桜修館中等教育学校 3年 中原 羽菜

「税」この言葉は私にとって、「お金を取られてしまう嫌なもの」という何とも漠然とした響きを持っていた。たしかに私たち中学生が普段「税」と関わることと云ったら、ものを買うときにかかる消費税くらいである。私の「税」のイメージの大部分を占める消費税は、2014年に5%から8%に、2019年には10%と2倍に増えた。税抜きの値段と消費税10%が加わった値段を見比べると、自分の数少ないお小遣いが知らない誰かに取られてしまったように感じて、税って嫌だなと思ってしまう。

しかし、そんな認識は、ある日何気なく見た動画で正反対になった。

それは世界の子どもたちの日常を写していた。ご飯を食べる。学校に行く。親のお手伝いをする。私にとっても当たり前な日常だ。朝起きたら、バスに乗って学校に行く。学校で授業を受けて、調べものをするときには図書館に行く。病気やけがなどで病院に行けば、安い治療費で適切な治療が受けられる。すべて「当たり前」な日常だ。しかし、その動画の子どもたちは違った。ご飯は一日中働いて稼いだお金でようやく買える。学校に行くにも、川につかりながら歩かなければいけなかったり、教科書がボロボロだったり、先生や教室がたりなかったり。その動画を見て私の「当たり前」な日常とは全く違って愕然とした。どうして私は私の日常を当たり前だと思って過ごせているのだろう。不思議に思って調べてみた。すると、日常のさまざまな部分を税金が支えていることがわかった。例えば、私が学校に行くことができるのは、税金を使って道路を整備し、学校の机やいすなどを買っているからだ。例えば、図書館を使えるのは税金で運営しているからで、治療費が安いのは一部を税金で負担しているからだ。私がずっと嫌だなと思っていた税金は、こんな「当たり前」を作っていたのである。

また、あの動画のように、私たちにとっての「当たり前」が当たり前でない人たちを、日本の税金で支援する取り組みがあることを知った。例えば政府開発援助（ODA）だ。日本は経済協力費として五千億円以上を開発途上国へ援助しており、世界でトップクラスの額だという。私たちが普段払っている税金は、このように私たち日本人だけでなく、世界の人々までもも助けていたのだ。

この出来事から、私の「税」に対するイメージは大きく変わった。私にとって「税」とは、日本の人々、世界の人々を助ける、影のヒーローのような存在だ。これからは「税」を払うということに誇りを持ち、この考えを忘れずに生きていきたい。